

コメ品種の特性と作付シェアに関する計量的分析

山根 史博

キーワード：コメ，品種選択，品種特性，収量性，品質，病虫害に対する抵抗性

1．はじめに

これまで、わが国では、コメの需給調整や消費者の良品質志向への対応を狙いとして、流通システムにおいて市場原理の導入が進められてきた。その結果、いかに収量を増やすかではなく、いかに産地米を市場に定着させていくかということが、生産者の課題として今後更に重要となることが考えられる。

産地米を市場に定着させるためには、生産者が消費者のニーズに適応できるような特性をもった品種を選択する必要がある。そのため、近年の消費者ニーズを踏まえた上で、どのような特性をもった品種を選択すべきかについて、これまで様々な議論がなされてきた。しかしながら、これらの議論は定性的なものにとどまっており、実際に生産者が品種選択においてそれぞれの特性をどのように考慮しているかについての実証的な研究はわが国ではほとんど行われていない。そこで本研究では、近年の消費者ニーズを踏まえ、品種特性の中でも特に収量性と品質、病虫害に対する抵抗性に焦点を置き、生産者がそれぞれの特性をどのように考慮して品種選択を行っているかについて検証し、品種選択の現状と課題を明らかにすることを目的とした。

2．研究方法

本研究では、平成2年から平成15年までの都道府県パネル・データを用い、品種の特性と作付シェアとの関係の推定を行った。それぞれの産地において作付シェアを伸ばすのは、品種選択戦略上重要と認められた特性を有する品種のはずであり、品種の特性と作付シェアとの関係を分析すれば、特性がどのように考慮されているかを洞察することができる。

特性の考慮の仕方に地域差があることが考えられる。そこで、全国的な推定を行うだけでなく、全国を6つのエリアに分け、それぞれのエリアについても同様の推定を行い、それぞれの推定結果を同時に検証することにした。

3．結果と考察

Random Effects モデルを用いて得られた推定結果から、まず品種選択における基礎とされる収量性に関しては、全国的にみれば作付シェアと正の相関がみられたが、エリア別にみた場合、それとは反対の結果が得られたエリアもいくつか認められた。また、本研究では品質を示す特性として外観品質と食味を採用したが、外観品質に関しては、作付シェアと負の相関がみられたエリアもあれば、正の相関がみられたエリアもあった。食味に関しては、有意な結果が得られなかったエリアが多かったものの、統計学的に有意な結果として作付シェアと正の相関があることが確認された。更に、病虫害に対する抵抗性として本研究ではいもち病抵抗性を採用したが、この特性に関しては、作付シェアと負の相関が認められた。

4．結論

以上から、生産者が品種選択において、収量性と外観品質を必ずしも重視しているとはいえないこと、食味を重視していること、いもち病抵抗性が重視されていないこと、が可能性として考えられる。消費者の志向が量から質に移行し、更に品質の中でも特に食味をより志向しているということが定性的にいわれているが、収量性と品質に関しては、このような消費者ニーズへの対応が品種選択に反映されているということがいえるかもしれない。しかしながら、今回のいもち病抵抗性の推定結果をみる限り、健康志向という比較的新しい消費者ニーズに対応した品種選択が行われている、ということはいえそうにない。